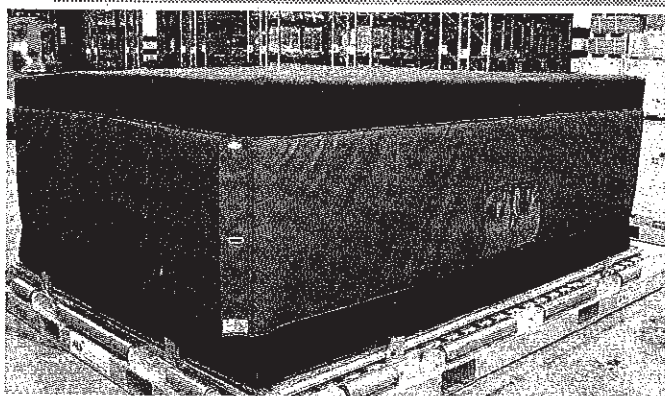


CO₂ 排出ドライアイス不要



日航は新たな温度管理ツールを積極的に採用する
(LD7コンテナ対応のサーマルブランケット)

日航 自社保冷コンテナ活用

アイスバッテリー組み合わせる

日本航空は今夏から、テラーメイド型医薬品輸送サービス「J SOLUTIONS PHARMA」を含む温度管理輸送サービスの一環として、自社保冷コンテナと蓄冷プレートを組み合わせた取り組みを検討している。CO₂を排出するドライアイスが不要となる分、利用者は貨物搭載量を増やすことが可能になるとともに、特殊保冷コンテナを利用する場合に比べて割安になると見ている。

同社は昨年8月から「J SOLUTIONS PHARMA」を開始し、新たな温度管理ツールを積極的に取り入れてきた。今回の取り組みは、現段階では需要を掘り起こしている状況だが、積極的に市場開拓に取り組んでいく方針だ。

蓄冷プレートはアイ・ティ・イー（ITE）、本社、東京都千代田区が独自開発した「アイスバッテリー」を利用する。日航はITEと共同開発した保冷ボックス（容量：28リットル、75リットル、150リットル）の3タイプを既に

運用しているが、航空コンテナの活用は初。

日航の自社保冷コンテナはドライアイスを利用して温度調整を行っているが、機内のCO₂濃度を適切に保つため、機材に応じてドライアイスの搭載量に制限

を設けている。一方、アイスバッテリーはCO₂を排出せず、また、何度も利用可能なため、環境負荷が低いという。利用者側から見れば、大口貨物を輸送する場合、大量のドライアイスを搭載せずに済む分、貨物

搭載量を増やすことも可能になると見ている。

「J SOLUTIONS PHARMA」自体は「新年度に入り、明らかに問い合わせや利用実績が伸びている」（貨物郵便本部 貨物路線部国際路線室 マーケティンググループ 医薬品ロジスティクスチーム）状況にある。

今年度初めから新たなツールとして「サーマルブランケット」の提供も開始。これは、急激な温度変化を防ぎ、濡損など貨物のダメージリスクも軽減するシートだ。特殊保冷コンテナを利用する場合と比べ、割安な費用で温度変化を一定の範囲に抑えることが可能という点がメリットという。今後も顧客のニーズを深掘りしながら、新たな温度管理ツールを開拓し、テラーメイド型のサービスを提供していく。